

第二章 福生の自然環境

一 地理的位置

福生町は地理調査所発行の五万分の一地形図の青梅の図に見られる。自然的位置は東経一三九度二〇分・北緯三十五度四三分である。

東京都心からは直線にして約三六^{キロメートル}距る西方に位置し、西多摩郡としては最東端で、昭島市と境して郡の玄関と呼称されるにふさわしい位置にある。

町内の一角からは富士山を始め、丹沢、御嶽、大嶽の山々や、狭山、加治、多西の丘陵を眺望することができる。

また、北部は瑞穂町に、西部は羽村町に、南部は多摩川を挟んで秋多町にそれぞれ境している。その長さは東西二、九九^{キロメートル}・南北五、六七二^{キロメートル}で、全面積は一〇、三五平方^{キロメートル}である。現在の福生町は青梅市を除けば、政治・文化・経済等のあらゆる面で西多摩郡内随一であるといわれる程に中心的存在にある。

それは人口数から見てもわかる通りであるが、更に郡の婦人生活館の設置に続いて、昭和三十五年には郡の自治会館の完成をみたこと、あるいは福生武陽信用金庫の近代的建造物やフードセンター、中学校の体育館など郡内の諸町村をしのぐものである。

交通上から見ても、また重要な位置にあり、古くは伊奈道・鎌倉街道・吉祥寺街道・青梅街道・日光街道が走り、

それら街道筋には小規模ながら、宿場の様相を示していたところもあり、そのため旅宿なども江戸期の福生には見られた。現在は青梅線・八高線・五日市線の国鉄が拝島駅で接し、青梅線は牛浜駅・福生駅、八高線は東福生駅、五日市線は熊川各駅を通じている。また乗合バスは、立川・青梅・昭島・五日市・瑞穂・秋多・羽村などに通じ、その発着点である。このように交通も郡内としては恵まれている。

他方福生町は、米軍の航空基地ということで複雑な問題もかかえている。しかし基地福生の名は、国際的にも重要な存在を示していることであろう。

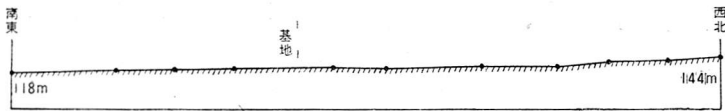
地元の長い懸案であった青梅線の複線化についても、いよいよ昭和三十五年の春より工事に着手した。この完成の暁には工場誘致などからんで、福生町の位置的存在がますます重要になってくると思われる。

二 地形と地質

福生町は武蔵野台地西部の一隅にあり、海拔は羽村町に接する加美の台地上の最高一四四メートルで、漸次南東に向うに従って低くなっていく。つまり航空基地内で一三三メートル、行政道路に沿って一二七メートル、更に最低一一八メートルと緩かな傾斜をみせながら拝島駅付近に延びている（第1図参照）。最上段面とのこれが傾斜の差は二六メートルである。

他方、西部の多摩川の河道に向っては河岸段丘が形成されていて、階段状に低くなっている。樹林も第一段丘面、第二段丘面にわずかに見られるが、勿論山地とはいえない。概して開けた地形で航空基地が設定された意味もそれであらう。

地形の成因について考えると、おそらくこの一帯は地質時代には水の底にあったことが想像される。すなわち第三紀の中新世から鮮新世のころの東京湾は、もっと西方に深く灣入していたことは幾多の文献が教えてくれる通りであ



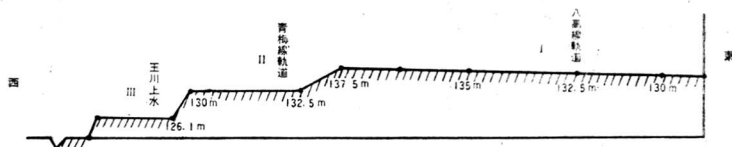
第1図 段丘面の西北～南東地形断面図

る。と同時に拝島駅付近に川原かと思われる程に円礫の露頭が見られることや、段丘の崖壁にも多くの礫層の堆積が見られることでも想像される。また、「立川・拝島など多摩川の左岸のどこどこに露出している軟い暗灰色または青灰色の泥質砂岩層であって、立川（貝殻坂）では貝化石を多産する」（藤本治義「関東地方・日本地質誌」二七一頁）ことや、また、昭島市内で井戸掘りの際に二枚貝の化石が発見された。これらによっても証明されるのである。

このような水底であった所が陸地になるについては、長い年月の間の地殻の変動があったわけである。すなわち、いまの多摩川の流路も地質時代には今とは想像もつかぬほど広大なもので、奥多摩の谷から流れ出た川が青梅附近から急に扇子の形に広がり、北方は霞丘陵、南方は多西丘陵によって、挟まれて流れていたものが、土地の隆起作用によって流路が次第に多西丘陵の側に寄っていったものであると考えられる。その際多摩川の水は奥多摩の奥の方から砂礫を運んできたが、谷口に至り流力が衰えるに従い、水底にそれらを堆積させて、隆起と堆積の運動作用が何回か自然に行われていくうちに、古東京湾は次第に太平洋に向けて後退して行く結果となり、このような自然運動が長い間続いているうちに、いつしかこの一帯が陸地化して扇状地の平野を形成したものと考えられる。

その後、地殻の大きな隆起作用は福生付近では大別して三回・乃至四回位にわたり行われたのではないかと推察される。

それは河岸段丘と称する隆起の原因によって形成された段丘が地内の各所に見られるからである。その第一段丘面は



第2図 神明社附近、東西地形断面図

八高線の軌道の走る面・第二段丘面が青梅線の走る面、更に第三段丘面が玉川上水の流れている面（第2図参照）、第四段丘面が清巖院のある面で、その下段面がかつては多摩川の氾濫原であったが、今は沖積地となり、福生町唯一の水田地帯となっている。これら段丘の高さは所によって五メートルに及ぶところもあり、明確に観察できるが場所によっては土地の侵蝕作用が甚だしく、形を明らかに止めず緩かな傾斜地となっているところもある。しかし現在地形学者の説によれば、この付近はまだまだ小さな段丘が数多くあることを証明しているというのを付け加えて、その点については省略する。

すなわち、福生町は青梅を要とする扇状地上に、更に多摩川によって形成された数段の河岸段丘上に展開する集落である。

この一帯は地質上の時代区分によると最も新しい地質時代に属し、新世代の第四期に含まれ洪積・沖積地であるといえる。

堆積の層序を見ると、大体最上部が関東ローム層という火山灰の堆積土によって覆われ、その下部が砂礫・円石層と更に粘土層の順に堆積している。これらは段丘の崖壁のあちこちに見られるが、厳密には町の一個所を深さ一五メートルボーリングした資料によって明確に知られる。すなわち砂礫の交った灰色・黄色・褐色の順に粘土層がかなりの深さまで堆積していることがわかる。

多摩橋から五日市線の鉄橋付近にかけての、多摩川の人工堤防の内側に見られる水田地帯などは最上層ですら一見して砂質層であることがわかる。この水田地帯に灌漑用水

を掘る工事が施された際、深さ約二メートルの地点で樫の流木が発見された（昭和三四・一・二六）。この流木は根元の直径が八五センチメートルで、根のまわりに砂岩質の石ころが付着していた。上流の河岸に生えていたのが洪水の際に押し流されてここに堆積したものであろう。柾目も鮮明で生木を思わすほどの新しさを感じた。これから推察しても、この水田一帯はきわめて近い年代の堆積地であると考えられる。

三 地下 水

地下水のことを述べるについて、先ず最初に福生で水に関係のある記録を「福生物語」という書物から抜粋してみることにする。

「藤井という人はフサはアイヌ語の『フッチャ』ではあるまいかということです。『フチ』は湖口で、『チャ』は片ほとりというわけだそうです。『フッチャ』で湖の畔ということになるのだそうです。云々、しかし私は福生の名の語源は『ブッセ』ではあるまいかと考える。『ブッセ』は湧水という意味であります。云々、神明神社の社前には滾々と湧き出て尽きぬ泉があります。又清巖院の域内にも同じように清水の湧き出る所があります。これから察するところ福生の語源は『ブッセ』でなければならぬと存じます。」

「このほかに湧水はある」水クボ、サカサ川などは上水の影響もあろうが、加美の伊藤儀平氏の所を出口（デグチ）というが今でも少し雨が降ると水が出る。そして自分が子供の時分には鯉をかったほど水が多かったと横田先生（校医の先生）は話された。

原ガイトのセメント工場の辺はイケッパタといい、大水が出た後はれるとミヅが出るといふ。（清水氏および高橋氏談）

神明社の北側にも『いけっぱた』といって水たまりがあったという話も二、三の人に聞いている。古い字の名にも池端、ヒカシ井土、イケ久保、出本、池尻、池ノ上（出本）『以上福生村誌稿にのっているままに書いた』などと水に関係あり、又ありそうな字がいくつもあった。このことから福生は湧水に関係があるということは考えられるであらう。

また、田村委員の調査によれば、長沢について調べてみると、先ず『田中』と呼ばれている家が現在三軒ばかりある。古老の話によると、昔は水田があったと聞いているという。それで田の中にあつたから田中と呼ばれたのではないかという話である。田中と呼ばれている一軒の家の伊東さん（初代の先祖は元禄年間に亡くなっている）の話でも神社の前には五十年ぐらい前まで田があったという。

そのほか三多摩民俗調査を立川愛雄氏にお願いした際の報告によれば「中福生では産土神明宮の境内の湧水が部落を流れていたのもその水をほとんどの家が利用していた。その水源地には嘉永四年（一八五二）夏建立の水神宮がある」など、あるいは、また安政六年（一八五九）七月十二日に牛浜一帯に大洪水がおこり、吉祥寺街道を濁流が渦巻き流れた絵記録などもある。そのほか、地頭井戸・弁慶井戸・公方井戸などの呼称をもった井戸を始め、かなり多くの古井戸が散在していたことも知られている。

以上あげた資料によって推察できるように、江戸期以前の福生全域には、至る処に湿地帯が分布していたことが考えられる。

現在に至っては、昭和二十五年に福生中学校理科部で町内の井戸の分布・深さを測定したが、その資料によると分布は第二段丘面より下段に多く、最上段丘面にはほとんど見られない。調査対象の井戸は三八五であるが、そのうちの^ト一三八は五^メ以下の深さで、その他は五^メ以上で中には二五^メ以上の深さの井戸も示されている。これによ

ると現在の地下水面は全般的に見ると浅いとは限らず、処によってかなりの相違があると考えられる。しかし、長沢・中福生の部落内を豊富な清流が道路面に近くして流れているし、段丘の崖壁などでは、地下水の溜まっているのがあちこちで観察されるし、あるいは中学校の校庭の隅の水溜りや、大雨後運動場の各所に小さな湧水の見られることや牛浜付近の大きな水溜りのできることなどは、段丘上の集落とはいえ水利には恵まれている地域であるといえよう。こうした点から考えても、古村の立地は下段面の多摩川淵から発達したことがわかる。近年に至っては町営の水道が施設され、最上段丘面にも都営・町営をはじめ幾多の住宅が建ち並びつつある現在である。

四 気 候

気候は概して良好であるといえよう。日本の気候区分から見ると、内陸性の気候帯に近いのではないかと思われる。

福生では正規の条件で気象観測を行なった結果の資料が得られないので、その細部にわたっては述べることができないが、ここでは、福生中学校の昭和三十四年度の「学校日誌・天気記録」を参考にして述べることにする。

冬は北西部に見られる連山の関係のためか、降雪も少く、一月・二月には雨量もきわめて少い。そのかわり「みたけおろし」などと呼ぶ北西の風が強く吹くことがしばしばある。

春の気候の変り期である三月の下旬から四月にかけては毎年突風が吹きまくり、土埃りが天高く舞上り空を覆う光景が見られ、開放的な校舎内などは相当の土埃りがたまることがある。

降雨日数は五月から六月にかけて多く、月のうち十日ちかく雨が降り続く。この入梅期を過ぎると、気温も日中は三〇度にも上昇することがある。しかし七月・八月は降雨日数は割合少い。また昼夜の気温の差も大きい。

秋に入り九月から十月にかけては、また降雨日数も多くなり時には台風の被害があることもある。ことに昭和三十四年には近年稀にみる台風の被害を受けたが、どちらかといえば、台風の影響は少い方であろう。この台風季を過ぎるとだんだん降雨日数も少くなり、澄みきった青空の下を赤とんぼの飛びまわる景色も見られ、富士山や丹沢の峯々を目の辺りに望むことができる。

参考までに青梅と立川の気温・降水量を上げておこう（第1表）。

気 温

立川	青梅	
二、二	二、四	一月
二、五	二、九	二月
六、〇	五、七	三月
二、二	二、七	四月
一六、三	一五、五	五月
一九、九	一九、四	六月
二五、一	二四、二	七月
二五、六	二四、九	八月
三、六	三、三	九月
一五、四	一五、五	一〇月
九、九	一〇、一	十一月
四、八	四、八	十二月
一三、三	一三、三	平均

降 水 量

立川	青梅	
三	七	一月
八、三	七、四	二月
一〇、三	一、五	三月
一、三	一、四	四月
二、九	一、四	五月
一〇、一	一、六	六月
一、〇	一、四	七月
一、九	一、〇	八月
二、四	二、〇	九月
二、五	二、三	一〇月
三、三	一、〇	十一月
六、四	七、三	十二月
一六、六	一五、七	計

第 1 表